

神の座

黒田 一 充

滋賀県大津市坂本の日吉大社は、古くから比叡山延暦寺と関係が深い。延暦寺の僧兵たちが、同社の神輿を担いで京都に下り、朝廷や院に強訴を行ったことはよく知られている。このような両社寺の関係は、明治初年の廃仏毀釈で一時断絶したが、現在はもとに復している。

4月の山王祭では、日吉大社の東本宮と西本宮でそれぞれ神事が行われる。西本宮の神事では、拝殿に7基の神輿が安置され、延暦寺の天台座主が参拝して五色の奉幣を行う。これは、五色の御幣を神前に供え、読経を行う儀礼である(図1)。



図1 山王祭・天台座主の五色の奉幣

また5月26日には、同じ西本宮に延暦寺の僧侶が集まって山王礼拝講が行われる。拝殿中央のやや本殿よりに高座を設け、読師と講師のふたりが座る。『法華経』八巻を一巻ずつ読師が経題を読み、講師が経の解釈を述べてその場にいる僧侶からの質問にも答える法華八講と呼ばれる法会を行う。

この法会が日吉大社でも行われるようになった由来は、万寿元年(1024)に境内と背後の山の本が一斉に枯れたため、神官が神意をうかがったところ、延暦寺の僧侶が僧兵などになって修学の道をおろそかにしている状況に神が怒ったのがその原因だったという。それを聞いた延暦寺の僧侶たちが、日吉の神の前で法華八講を修したので神が喜び、その後恒例になったのだという。廃仏毀釈後も、

延暦寺内の讚仏堂でこの法会は続けられ、昭和22年(1947)から再び日吉大社で行われるようになっていく。

法華八講は、1日2巻ずつ朝座・夕座を行って、長い場合は4日間もかかることもあった法会であるが、現在の山王礼拝講は半日の儀礼になっている。拝殿の周囲で神職や参拝者たちが見守り、拝殿の上には高座を囲んで約20名の僧侶が座り、順に高座へ上がって読師や講師を勤める。法会の途中には、天台声明の唱和や檜を撒く散華行道などが行われる。最後は拝殿と楼門の間に僧侶が2列に並んで、伽陀という声明を唱和して礼拝講が終わる。

拝殿正面奥、本殿側の座は横座と呼ばれ、その中央の左右から一藁・二藁と順に席が定まっておき、一藁は天台座主が座ることになっている。ところが座主は正面ではなく、一藁・二藁の間にもうひとつ円座が敷かれており、そこには人が座らない。

山王礼拝講の儀礼内容については、延暦寺法儀音律研究所・延暦寺徒弟学問所がまとめた『山王礼拝講(法華八講)』(1958年)が詳しい。

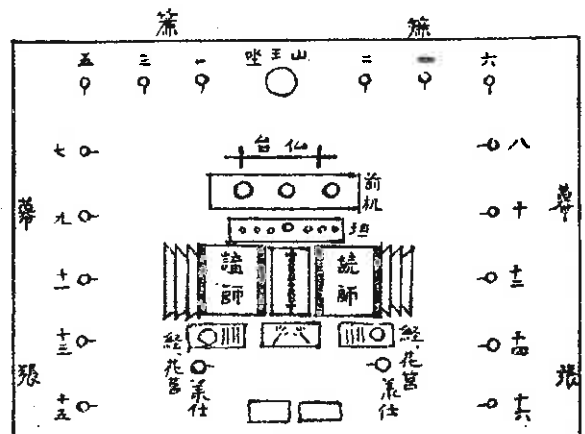


図2 山王礼拝講の道場図(部分)
 (『山王礼拝講』1958年より引用)

同書の「禮拝講道場圖」には、この円座の場所を「山王坐」と記している(図2)。つまり、この座は日吉の神のためのものであり、神が参加してこの儀礼を見守っていることを、目

に見える形で表している（図3）。

このような神の座を設ける事例は、奈良県川西町北吐田の杵築神社の宮座儀礼でも見られる。同社の宮座は北吐田・南吐田にそれぞれあり、十人衆とよばれる長老衆を中心に組織されている。十人衆は、年長者から順に一老・



図3 日吉大社・山王礼拝講
(朱色の法衣が天台座主、その左側の円座が山王坐)

二老と呼ばれ、一老と二老が行事を中心となる。

秋の祭りは、十人衆とは別に選ばれたトウヤ（頭屋）が中心となって行われる。トウヤ宅では、7日前に玄関で小宮をつくる。芝を敷いて砂を盛り、杉の小枝を立てて祭壇をつくる。竜田川へ身を清めに行き、石を2個拾い、御幣とともに祀って神霊を迎える。北吐田では木枠に砂を盛った小形のものになり、南吐田は竜田川に行かず、石の代わりに小鏡を祀っている。トウヤの数は、北吐田は2軒、南吐田は3軒である。

祭りは10月第2日曜日（もとは旧9月17日）で、前日の土曜日午後よぐに宵宮が行われる。両地区のトウヤ宅を出発したお渡りの行列が神社へ向かい、拝殿に一同が座り、神職を迎えて神事を行う。『川西町史・本文編』（2004年）によると、両地区の神事は別々に行われていたが、現在は合同になっている。その後、南吐田は拝殿南側の社務所、北吐田はそのまま拝殿で座が開かれる。一同に枝豆が配られ、折敷に載せた土器の盃を廻し、給仕の役が神酒を順番についで廻る。

北吐田の座では、素襖姿の一老・二老の隣に袴姿のふたりのトウヤ、残りの十人衆や他の宮座の衆が座る（図4）が、一老の横は空いており、膳が置かれる。膳は、折敷の上に裏表に重ねた

土器の盃、ショウハンと呼ぶ四角い板2枚に枝豆と茄子が載っている。折敷は、盃事がひと廻りするごとに新しいものに替えられる。この直会が終わると、それぞれトウヤ宅へ戻って解散する。

この一老の横は「神さんの席」と呼ばれ、

この膳は神が食べるための食事である（図5）。南吐田の座はこの神さんの席を設けないが、北吐田では、翌日早朝の祭りの当日や2月初旬に行われるショウゴンの座でも一老の横に神さんの席を設ける。

直会は、神に供えた神饌を下げて神と祭りに参加した人が一緒に食べる場であるが、そこに神の座を設けることで、神と一緒に食べていることをより具体的な形で表しているのが、北吐田の事例である。

このような祭りの場に、神の座をわざわざ設けることについては、これまであまり注目されることはなかったが、儀礼に参加する人びとの神に対する親しみを感じる事例である。



図4 北吐田の座（秋祭り宵宮）



図5 北吐田の神さんの席（一老の横）